



第42回「おかねの作文」コンクール

二十円の価値

青森県・平内町立西平内中学校 1年 山田 友希

「それだったら、みんなで20円寄付した方が早いじゃん！」

私の心の中の言葉を、代わりに声に出してくれた人がいました。なんだ、みんなもそう思っていたんだ——。

それは、学習委員会の活動の一場で、先生の話聞いていたときのことでした。私の学校では、恵まれない国々の子どもたちにワクチン代を送るために、ペットボトルのキャップを集める活動をしています。きっかけは、去年の文化祭で、バザー担当の学習委員会がリサイクル商品を売るだけでなく、ゴミになってしまうペットボトルのキャップも回収して、お金にかえようと考えたことからだったそうです。

中学に入学して、学習委員となった私は、「なぜ、そんな活動を学習委員がやらなくちゃいけないの?」と、疑問に思っていました。しかも、一人分のワクチン代にするには、キャップを800個も集めなければならないと聞いて、それをいちいち数えるなんて……と、実はめんどろうだなど思っていたのです。何より、800個でたったの20円、というのが一番納得できませんでした。

そんなときです。委員の中から、「キャップを集めるより、バザーの売上金をごっそり送った方が早い」という声が出たのは。20円くらいなら、出してもたいしたことないし、手間をかけるより、全校生徒から20円ずつ集めれば、一気にたくさんの人を救えるのにと、私も思いました。

でも、委員長が発言は違いました。

「捨てればゴミにしかならないものを、資源にかえるからこそ、意味があるんだよ。燃やさず集めればお金にかわって、人も助けてあげられるし……。」

それを聞いて、少し、やってみるかという気になりました。

活動は、昼休みや放課後にもやらなければなりません。全校と同じ人数の、46人を救おうという目標があったので、正確に数を数えて、経過を報告しなければならなかったからです。10個ずつ山を作っての、地道な作業でした。10個の山を80個作って、やっと20円。これを46人分……。山ほどあるキャッ

プなのに、20円ずつにしかならないことに、ため息が出てきました。

やっと、2万個に達したころ、新聞に活動が紹介されました。すると、みんなの関心が高まり、今までよりもっと回収してきてくれるようになりました。地域の方々も、わざわざ学校へ足を運んで、協力してくれるようになりました。

知らないうちに、私は、この活動に夢中になっていました。あいかわらず大変でしたが、みんなが一つになって、外国の子どもたちのためにキャップをお金にかえようとしている、その思いを実現させるために働いているんだと、思えるようになったからです。それまで、1個くらいならいいか、と捨てていたのが、1円にもならない1個もお金に見えるようになり、本当に変わったな、と思います。

キャップの山が、ゴミの山ではなく、宝の山に見えてきたころ、私は、キャップを価値のあるものとして考えるようになりました。数えた800個の「20円」は、「たったの20円」から、「苦勞して集めた大切な20円」になっていたのです。

私は、もしかしたら、お金のことをかん違いしていたのかもしれない、と思いました。「20円」くらいと思って、紛失しても気にもかけなかったその20円で、よその国の子どもは命が救われるかもしれない——。それなのに私たちは、「20円」の価値に気づかないで、「20円じゃ何も買えない」とか、「20円くらいなくなったって、たいしたことない」と、あたりまえに思っていたのです。

苦勞して数えたキャップを見て、私自身も、親が苦勞して働いてくれたから、何の不自由もなく、お金をぜいたくに使えていたのだなど、納得できたように思います。

私は、これからも学習委員の活動に誇りを持って取り組み、人の命を救える「20円」の価値を、大切にしていこうと思います。

